

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

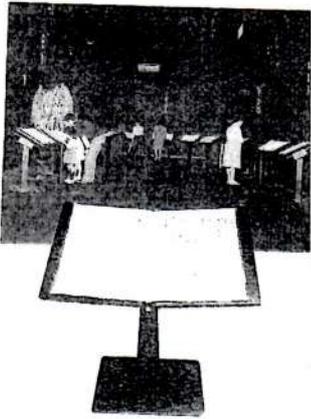
石原 昌家

<7>

私の戦争体験の聞き取りの私(私は当時29歳)。調査は、大学の講義の受講生たちとの関わりを抜きにしては語れない。

学生の母親

個人が、激戦場における体験について初の聞き取り調査をした方は、受講生の母親の宇久照子さん(沖繩戦当時16歳)だった。戦後72年たったいま思えば、当時は沖繩戦終結から26年目だったから、宇久さんはわずか42歳の若い母だった。



旧・県立平和祈念資料館の証言展示(県立平和祈念資料館ガイドブック「平和への証言」から)

験が、堰を切ったように、次々と繰り広げられた。私は、沖繩戦というのは、言葉では表現できないような恐るべき出来事だったこと、体験者の生の言葉として初めて聞き、身震いしたものである。聞き取り最初の宇久さんの体験記録は、『沖繩戦史10』沖繩戦記録

の一部が、いの一冊に紹介されている。「(南部撤退) 旧首里市 宇久照子(当時十六才) 首里では、アメリカ兵の姿こそみませんでした。接近戦になって、ただ、小銃だけをバンバンうち合っていたので、敵はもうま近にせまっていたるん

(後略) 赤田あたりではおびたしい住民の死体がありました」(51頁)

「(死の道連れ) 玉那覇のおばあさんが、おじいさんとどこにいらっしやい、となんども呼んだんですが、おじいさんはど

こにいつても死ぬ時は死ぬのだから、そんなきたないところはいやだ」といつて、せつたい豚小屋にはこな

で、このおじいさんは寝てしまったのかな、と思つて、ムシロを開けたら、首がふきとばされて、胴体だけになっていました。玉那覇のおばあさんが、ワツタケカガせました。姿は、かくれて見えなかったのです。後の方で、「コラッ！ おまえたち、出ていけ！ とさげんでいたが、私たちが言っているのか、ほかの人に言っているのか分からなかつた。すると、近くで赤ちゃんの泣き声が出て、そこに日本兵の弾がうちこまれ、殺されました。この海岸に来てからは、日本兵によって民間人が殺される場面は、いちどならず見ました。アメリカ兵は、日本の兵隊にたいして撃つてくるのであつて、民間人とわかれは撃たなかつたもので、すから、無きへつに撃つてくる友軍の兵隊のほうに、アメリカ兵よりもこわい存在でした。赤い緋入れの羽織の私と、えり巻きをした母、それに手ぬぐいでほほかむりをしている父の三人は、アタンのしげみの中で、しっかりと手をつないで、身じろぎもしないで、ひそんでいました。アメリカ軍は、海からこちらに向かつて、バン、バン、バンと機銃掃射してくるし、こちらでは、日本兵に小銃でいつやられるかわからない、という両方からの圧迫感にたえられず、どうアタンのしげみから砂場にでました。もうやられるならやられていい、という覚悟ができたので、逃げる場所もないこの辺りです。干潮のときは、満潮のときは、は岸にいて、干潮のときは、波がひたひたと足もとまでくる所までおどっていました。この場所では、日本兵が同じグループの日本兵に殺されるのを見ました」(121頁)

初の聞き取り調査

生の言葉に身震い

絶体絶命、板挟みの住民

2(1040)1055に収録されている。

展示

しかも1978年に再オープンした県立平和祈念資料館の証言展示のメインのひとつに採用された。それは83年12月に発行された『平和への証言―沖繩県立平和祈念資料館ガイドブック』(県生活福祉部保護課)にも、聞き取りの内容

だなあ、とひしひし感じました。逃げるうちゅうでも、鳥居あたりに大きな穴がポツカリあいていて、その辺りにゴロゴロ日本兵が死んでいるのです。(中略) 友軍は、われわれがせつかく秘密にのぼつて来ているのに、おまえたちが騒がしいので敵に見つかつてしま

いのです。そして、体をムシロでまいて、大きな穴がギョの木のあいだに一人か

けたら、イーッと声を出したので、もう私はとびあが

るほどおどろきました(後略)「(シューサイド・クリフ) ビューッ、ビューッ、ビューッ、ビューッ、砂地の砂がとぶので、おどろいて見ると、友軍の兵隊が私

たちにに向けて小銃をうって、身じろぎもしないで、ひそんでいました。アメリカ軍は、海からこちらに向かつて、バン、バン、バンと機銃掃射してくるし、こちらでは、日本兵に小銃でいつやられるかわからない、という両方からの圧迫感にたえられず、どうアタンのしげみから砂場にでました。もうやられるならやられていい、という覚悟ができたので、逃げる場所もないこの辺りです。干潮のときは、満潮のときは、は岸にいて、干潮のときは、波がひたひたと足もとまでくる所までおどっていました。この場所では、日本兵が同じグループの日本兵に殺されるのを見ました」(121頁)

(沖繩国際大学名誉教授 (次回はおす掲載))